

よりよい社会を創造する生徒が育つ社会科学習

名古屋市立天神山中学校教諭 服 部 樹

I 研究のねらい

現代社会は、グローバル化が進展し、異なる文化や考えをもつ人々との結び付きが深まった多様化した社会と言える。人や物の移動が活発化し、政治・経済、食料や資源など、様々な分野において国際的に協力関係を築き上げる一方、人種差別問題や民族紛争など、互いの考えや文化を受け入れることができずに起こる問題が後を絶たない。

中央教育審議会答申『令和の日本型教育』の構築を目指して」では、「あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となること」と記されている。また、令和5年に出された、「ナゴヤ学びのコンパス」では、名古屋市の学校教育を通じて実現したい市民の姿として、「自由な市民として、互いを認め合い、共に社会を創造する」と示されており、多様な立場や考えを認め合える社会の創り手を育てていくことを目指していることが分かる。こうした状況から、私は、「よりよい社会を創造する生徒」を育てたいと考えた。私の考える「よりよい社会を創造する」とは、社会に見られる課題の解決に向けて、他者と対話を図りながら解決策について根拠をもって主張を組み立て、より望ましい社会を考えることである。「より望ましい社会を考える」とは、自分の考えを異なる考えをもつ人に押し付けるのではなく、異なる考えをもつ人の考えを聞いて、その考えを踏まえながら、自分の考えを必要に応じて見直すことである。

そこで、私は、「対話型論証モデル」を参考にして研究を進めていきたいと考えた。「対話型論証」とは、京都大学教授の松下佳代氏が著書の中で、「ある問題に対して、他者と対話しながら、根拠をもって主張を組み立て、結論を導く活動」と述べている。「よりよい社会を創造する」ためには、社会に見られる課題の解決に向けて根拠（事実・データ）に基づいて自分の考えをもち、他者と対話することで自分とは異なる意見に耳を傾け、それを考慮しながら自分の考えを見直すことが大切である。「よりよい社会を創造する」生徒を育てることは、異なる文化や考えをもつ人々との結び付きが深まった現代社会を生きる素地をつくる上で意義がある。

II 研究の方法

1 研究の対象 名古屋市立天神山中学校 第2学年 32人

2 基本的な考え

主題に迫るためには、学習課題について、根拠をもって自分の考えをもち、他者と対話を図ることで、異なる考えに触れる必要がある。そこで、「捉える」「考える」「対話する」の3段階の学習過程を設定し、より望ましい社会について自分の考えをまとめられるように学習を進める【資料1】。

段階	主な学習活動
捉える	① 学習課題を捉える。
考える	② 学習課題について調べる。 ③ 「考えプロセスシート」を用いて、学習課題について自分の考えをもつ。
対話する	④ 「同じ」考えをもつ生徒同士で話し合う。 ⑤ 「異なる」考えをもつ生徒同士で話し合う。 ⑥ 学級全体で学習課題について話し合い、より望ましい社会について自分の考えをまとめる。

【資料1 基本的な学習過程】

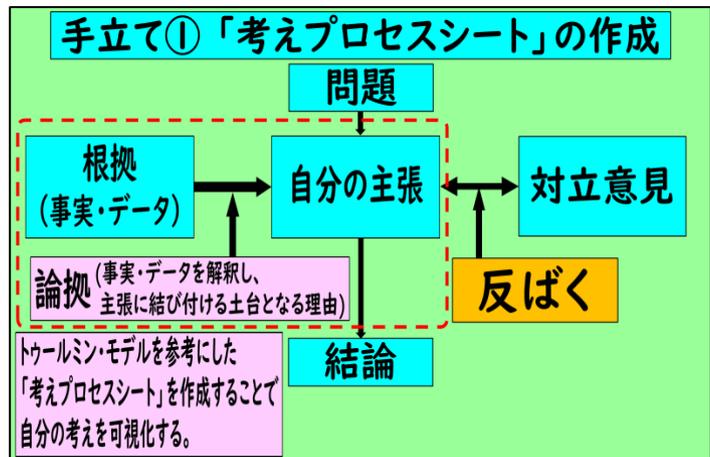
(1) 捉える段階

日本の様々な地域の特色をつかみ、それぞれの地域で抱えている課題を捉えさせ、学習課題を設定する。また、生徒が学習課題について具体的に考えることができるように、身近な地域の特色と比較することを通して、課題を把握しやすくする。

(2) 考える段階

学習課題について、調べる視点を設定し、その視点から学習課題に迫ることができるようにする。

生徒が調べたことを基に学習課題に対する自分の考えを「考えプロセスシート」にまとめる。ツールミン・モデル（「対話型論証モデル」の点線枠で囲った部分）を基に作成した「考えプロセスシート」を使うことで、根拠をもって自分の主張（考え）の論拠（事実・データを解釈し、主張に結び付ける土台となる理由）を述べることを



【資料2 「考えプロセスシート」の作成】

できるようにする。また、自分の考えを可視化して他者に示すことができるようにする【資料2】。

シートには、まず調べて得た事実やデータを記述する。次に、事実やデータから考えた主張を右側に記述する。そして、論拠を下に記述する。このような手順で「考えプロセスシート」を作成することで、自分の考えを可視化し、他者と対話するときに生かすようにする。

(3) 対話する段階

まず初めに、「考える」段階でまとめた学習課題に対する自分の考えを、「同じ」考えをもつ生徒同士のグループで話し合う。この活動を行うことで、主張を同じくするものの、その主張に至る根拠や論拠が異なることに気付くことができるようにする。

次に、「異なる」考えをもつ生徒同士のグループで話し合う。この活動を行うことで、主張が異なることを捉えるだけでなく、何を根拠や論拠としているのか捉えやすくする。

最後に、学級全体で話し合う。この活動では、「考えプロセスシート」を用いて、「立論→反論→反ばく」の流れで進める。まず、それぞれの視点から根拠と論拠を明確にして自分の考えを述べる。次に、相手の立論で分かりにくかったり、納得できなかったりする点について意見を述べる。さらに、相手側の意見に対する批判や相手側から受けた批判に対する反論を行う。より望ましい社会について考える。私の理想とする社会は、少子高齢を改善した社会です。なぜなら、「人」が少ないと労働力が不足し、経済活動の活力が失われます。社会保障の面でも若い世代の負担が増えてしまうからです。

手立て②「考えプロセスシート」を活用した話し合い活動

学習課題「理想とする社会になるための最優先課題を考えよう」

立論 それぞれの視点から、学習課題に対する考えを明確に述べる。
 日本は「資源・エネルギー政策」に力を入れるべきだと考えます。なぜなら、電気やガソリンは私たちの生活に必要不可欠だからです。
 日本は「少子化対策」に力を入れるべきだと考えます。なぜなら、将来的に労働人口が減少してしまうからです。

反論 相手の立論で分かりにくかったり、納得できなかったりする点について意見を述べる。
 労働人口が減少したら、外国人労働者を多く雇ったり、機械でできるように工夫したりしていけばよいのではないですか？
 電気やガソリンを多く消費すると、地球温暖化につながっていくのではないのでしょうか？

反ばく 相手側の意見に対する批判や相手側から受けた批判に対する反論を行う。
 地球温暖化を防止するためにも、再生可能エネルギーや電気自動車など環境に優しいエネルギーをより一層普及させたいと思います。
 高齢者を経済的に支えるためには若い世代の力が必要です。だから、少子化対策に力を入れないと若い世代の負担が増えてしまいます。

より望ましい社会について考える
 私の理想とする社会は、少子高齢を改善した社会です。なぜなら、「人」が少ないと労働力が不足し、経済活動の活力が失われます。社会保障の面でも若い世代の負担が増えてしまうからです。

考えプロセスシート

【資料3 「考えプロセスシート」を活用した話し合い活動】

り、納得できなかったりする点について意見を述べる。さらに、相手側の意見に対する批判や相手側か

ら受けた批判に対する反論を行う。この一連の話合い活動を行うことで、学習課題に対する自分の考えの根拠（事実・データ）や論拠を見直す。そして、話合い活動後に学習課題に対する自分と異なる考えに触れながらより望ましい社会について考えることができるようにする【P. 82 資料 3】。

3 授業研究を通して明らかにしたいこと

- (1) 「考える」段階において、「考えプロセスシート」を作成することは、根拠をもって学習課題に対する考えの論拠を述べる上で有効か、「考えプロセスシート」への記述内容からつかむ。
- (2) 「対話する」段階において、「考えプロセスシート」を活用して話し合うことは、異なる考えに触れながら、より望ましい社会について考える上で有効か、学習後のプリントへの記述内容からつかむ。

III 生徒の実態

- 1 調査日 令和5年6月実施
- 2 調査方法 質問紙法と授業の記述分析
- 3 調査対象 名古屋市立天神山中学校第2学年 32人
- 4 調査の結果と考察

(1) 根拠をもって自分の考えを述べることについて ※ 2人欠席

質問紙で、「①根拠をもって自分の考えを述べることを意識しているか」という意識調査と「②根拠をもって、考えを述べているか（「これからの日本のエネルギー政策の在り方について考えよう」という学習課題に対する考え）」と生徒の記述調査をクロス集計すると右のような結果になった【資料4】。

		①根拠をもって自分の考えを述べることを意識しているか			
		いる	少し	あまり	いない
②根拠をもって、考えを述べているか	いる	3人 生徒A	13人 生徒B	1人	
	いない	3人	6人	3人 生徒C	1人

【資料4 根拠をもって自分の考えを述べることについて】

この結果から、30人中25人の生徒が根拠をもって自分の考えを述べることを意識していることが分かった。しかし、「これからの日本のエネルギー政策の在り方について考えよう」という学習課題に対して、「無駄な電気を削減し、少しずつ再生可能エネルギーにしていくとよいと思う」「火力発電に頼りすぎずソーラーパネルを増やしていくとよいと思う」などと、30人中13人の生徒が根拠をもって考えを述べていないことが分かった。自分の考えを述べるときには、何を根拠にしているのかを視覚的に捉えられるように学習プリントを工夫する必要があると考える。

(2) 将来の社会を考えることについて ※ 2人欠席

将来の社会について、「①関心があるか」「②考えたことがあるか」を問い、クロス集計すると、右のような結果になった【資料5】。30人中21人の生徒が、将来の社会について関心があり、考えていることが分かる。より多くの生徒が、関心をもちやすいような課題を設定し、考える場面を設定するとともに、他者との対話を通して、より望ましい社会を考えさせたい。

		①将来の社会について関心があるか			
		ある	少しある	あまりない	ない
②将来の社会について考えたことがあるか	ある	10人 生徒A	1人		
	少しある	2人	8人	2人	
	書い び		3人 生徒B	2人 生徒C	
	ない				2人

【資料5 将来の社会を考えることについて】

IV 第1次授業研究（6月）

- 1 単元 日本の諸地域 中国・四国地方
- 2 目標

中国・四国地方の人口分布から、中国・四国地方では過疎化が進んでいて、地域の課題として挙げられることを捉える。そして、過疎化を防ぐためにはどうすればよいのかを様々な視点から考え、他者と

対話することで、根拠をもって中国・四国地方のより望ましい社会について考えることができるようにする。

3 検証項目

- (1) 「考える」段階において、「考えプロセスシート」を作成することは、根拠をもって学習課題に対する考えの論拠を述べる上で有効か、「考えプロセスシート」への記述内容からつかむ。
- (2) 「対話する」段階において、「考えプロセスシート」を活用して話し合うことは、異なる考えに触れながら、中国・四国地方のより望ましい社会について考える上で有効か、学習後のプリントへの記述内容からつかむ。

4 実践の概要（6時間完了）

段階	主な学習活動
捉える	第1時 中国・四国地方は地形や気候の違いから三つの地域に区分できることを理解する。 第2時 中国・四国地方の人口分布の様子を捉える。 【学習課題】 中国・四国地方の過疎化を防ぐためには、どこに力を入れるべきだろう？
考える	第3時 学習課題に対する自分の考えをまとめるために、根拠となりそうな事実やデータを教科書や資料集で調べる。 【調べる視点】 地域おこし協力隊（多様な活動）・第六次産業（地域の特色を生かした産業）・交通網の整備（移動手段の多様化） 第4時 調べたことを基に、「考えプロセスシート」に学習課題に対する考えをまとめる。 【検証場面1】
対話する	第5時 「考えプロセスシート」を基に、学習課題について、「同じ」考えの生徒同士のグループ、「異なる」考えの生徒同士のグループで話し合う。 第6時 「考えプロセスシート」を基に、学習課題について、学級全体で話し合い、中国・四国地方のより望ましい社会をプリントにまとめる。 【検証場面2】

5 第1次授業研究の結果と考察

(1) 検証場面1（第4時）

第4時は、前時に調べたことを基に、「考えプロセスシート」に学習課題に対する自分の考えをまとめた。

生徒Aは、学習課題に対して、「地域おこし協力隊に力を入れるべき」と考えた。「過疎地域の高齢

<根拠(事実・データ)>
 地域おこし協力隊は過疎地域を活性化している。ふるさと納税を呼び掛けたり、企業、移住者を誘致したりしている。また、歴史的資源による呼び掛けやアニメとのコラボ、SNSなどを活用して、多くの人に地域の魅力が伝わりやすいように試行錯誤して過疎化を防いでいる。

<主張(自分の考え)>
 私は、中国・四国地方の過疎化を防ぐためには、
①地域おこし協力隊
②第六次産業
③交通網の整備
 に力を入れるべきだと考えます。

過疎地域の高齢者・若者の比率

地域おこし協力隊の隊員数の変化

<論拠> 過疎地域による若者が年々減っていき高齢者は年々増えていっているが、地域おこし協力隊による動員数は年々増えている。第六次産業や交通網の整備も大切だが、まず過疎地域に住んだり、地域貢献したりすれば、その地域の魅力も伝えられ、過疎化を防ぐことにつながると思うから。

【資料6 生徒Aが作成した「考えプロセスシート」】

者と若者の人口の変化の様子」と「地域おこし協力隊の隊員数の変化」の複数の根拠をもって、「過疎

地域による若者が年々減っていき高齢者は年々増えていっているが、地域おこし協力隊による動員数は年々増えている。第六次産業や交通網の整備も大切だが、まず過疎地域に住んだり、地域貢献したりすれば、その地域の魅力も伝えられ、過疎化を防ぐことにつながると思うから」と、論拠を述べた【資料6】。

生徒Bは、「交通網の整備」を選択した。瀬戸中央自動車道の交通量が増加していることを根拠として、「交通網の整備に力を入れることで、物資を輸送するコストを抑えることができる。また、人や物の移動が活発になり、経済が活性化し、地域の活性化につながるから」と述べた。

生徒Cは、「交通網の整備」を選択し、根拠を記述することはできたが、論拠を述べるまでに至らなかった。

(2) 検証場面1の考察 ※ 2人欠席

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
学習課題に対して、複数の根拠をもって論拠を述べる事ができる。	学習課題に対して、根拠をもって論拠を述べる事ができる。	学習課題に対して、根拠をもって論拠を述べる事ができない。
23人		7人 (生徒C)
3人 (生徒A)	20人 (生徒B)	

学習課題に対して、根拠をもって論拠を述べる事ができた生徒は30人中23人だった。これは、「考えプロセスシート」を作成したことで、何を根拠として自分の考えをもち、論拠を述べればよいのかを視覚的に捉える事ができたためだと考える。一方で、学習課題に対して、根拠をもって論拠を述べる事ができなかった生徒は30人中7人いた。これは、論拠を述べる際に何を根拠とすればよいのかが分からなかったためと考える。

(3) 検証場面2 (第6時)

第6時では、学級全体で学習課題について話し合い活動をした。まず、三つの視点を選択した理由を主張した。「地域おこし協力隊」を選択した理由は、「地域の活性化につながる」「地域おこし協力隊の人たちの定住率が50%ある」が挙げられた。「第六次産業」を選択した理由は、「特産品を販売して知名度が上がるにつながる」「地域の活性化につながる」が挙げられた。「交通網の整備」を選択した理由は、「人や物の移動が活発になり、経済の活性化につながる」「輸送コストの低下につながる」が挙げられた。次に、それぞれの視点に対しての反論を行った。「地域おこし協力隊」に対しては、「地域住民とのトラブルが多発している」「自治体によって制度運用が異なる」、「第六次産業」に対しては、「専門性が必要」「費用が掛かる」、「交通網の整備」に対しては、「整備するのに時間が掛かる」「自然を壊してしまう」ことが挙げられた。最後に反ばくを行うと、『「地域おこし協力隊は、地域住民とのトラブルが多発している」』ことに対して、『「交通網の整備は、道路を整備するのに費用や時間が掛かるし、第六次産業は、専門知識や衛生管理が必要ですぐに取り組みせず費用が掛かる。だから、即効性のある地域おこし協力隊に力を入れるべき』』や『「交通網の整備は、費用が掛かり労力も費やす』』ことに対して、『「人や物の行き来を活発にすることで、特産品を他地域に販売するときに輸送コストを抑えることや、経済の活性化につながるので、交通網の整備に力を入れるべき』』、『「第六次産業は、専門知識や衛生管理が必要で費用が掛かる』』ことに対して、『「地域の特産品を生産し、販売することで地域の知名度アップにつながり、観光客の増加や地域の人々の所得の向上につながる』』との意見が出てきた。学級全体での話し合い活動を終えた後、中国・四国地方のより望ましい社会についてプリントに自分の考えをまとめた。

生徒Aは、話し合い活動を通して、「第六次産業は、専門知識や衛生管理が必要で費用も掛かる」「交通網の整備は、道路を整備するのに費用や時間が掛かるだけでなく、自然破壊にもつながる」「地域お

こし協力隊の方が、費用が掛からないし、取り組むのに時間が掛からない」といった点を踏まえて、中国・四国地方のより望ましい社会についてまとめた【資料7】。

【話し合い活動では、「地域おこし協力隊」を選択】

中国・四国地方は、多くの観光客が訪れ、経済も自然環境も豊かで明るい社会になってほしいです。そのためにも、過疎化が進んでいるので、「地域おこし協力隊」によって地域の活発化や地域貢献をしてもらいたいと思います。そして、第六次産業による地域の特産品を生産することが知名度アップにもつながります。また、交通網の整備を進めることで、人々が行き来しやすくなり、観光客の増加につながり、経済の活性化にもつながります。

(凡例 _____ : 地域おこし協力隊 _____ : 第六次産業 _____ : 交通網の整備)

【資料7 生徒Aの「中国・四国地方のより望ましい社会」についてまとめた記述】

生徒Bは、話し合い活動を通して、「交通網を整備することで物資の輸送に関するコストを抑えることにつながる」「地域おこし協力隊や第六次産業に取り組むには交通網の整備が進んでいないといけない」といった点を踏まえて、中国・四国地方のより望ましい社会についてまとめた【資料8】。

【話し合い活動では、「交通網の整備」を選択】

現在、中国・四国地方では、過疎化が進んでおり、それを防ぐために第六次産業によって地域の特産品を生産したり、交通網を整備し人や物の行き来をしやすくしたりと、経済の活性化により地域を発展させて、みんなが助け合える社会にしていくとよいと思います。(凡例 資料7と同じ)

【資料8 生徒Bの「中国・四国地方のより望ましい社会」についてまとめた記述】

生徒Cは、話し合い活動を通して、「地域おこし協力隊」や「第六次産業」の考えに触れることができず、中国・四国地方のより望ましい社会について「交通網の整備をしているいろいろな人が訪れることができるようにして過疎化を防ぐことができればよいと思う」と述べるにとどまった。

(4) 検証場面2の考察 ※ 2人欠席

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
異なる考えに触れながら、根拠をもって複数の視点から中国・四国地方のより望ましい社会について考えることができる。	異なる考えに触れながら、根拠をもって中国・四国地方のより望ましい社会について考えることができる。	異なる考えに触れながら、根拠をもって中国・四国地方のより望ましい社会について考えることができない。
23人		7人 (生徒C)
5人 (生徒A)	18人 (生徒B)	

「考えプロセスシート」を互いに確認しながら他者と対話することで、異なる考えに触れながら、根拠をもって中国・四国地方のより望ましい社会について考えることができた生徒は30人中23人だった。これは、他者との対話を通して、自分とは異なる視点の根拠や論拠を知ること、自分の考えを見直すことができたためだと考える。一方で、異なる考えに触れながら、根拠をもって中国・四国地方のより望ましい社会について考えることができなかった生徒は30人中7人だった。これは、それぞれの視点のよい点、問題点について比較・検討が十分でなかったためと考える。

V 長期研修で学んだこと

1 兵庫教育大学理事・副学長 吉水 裕也 氏

吉水裕也氏は、「ディベートを行うときに、ツールミン・モデルを活用することはよいことである。『対話型論証モデル』に示されている『反ばく』は『留保条件』である」と述べられた。また、吉水氏

自身の過去の研究を基に、「リバトル（留保条件）をプラスすることによって、ディベートのもつ本来の目的に近づく。ディベートは単に相手を論破することにはあらず、相手から得た情報で自説の弱いところが補強できたり、問題点を整理できたり、相手と歩み寄る姿勢が身に付くのがディベートである」と述べ、トゥールミン・モデルを活用した話し合い活動の方法について御指導いただいた。

2 鳴門教育大学理事・副学長 梅津 正美 氏

梅津正美氏からは、社会的判断の構成として、トゥールミン・モデルを示していただいた。「①『主張（結論）』は、『いかに～すべきか』『何を選択するか』と評価（価値的知識）を示すこと。②『根拠となる事実（資料・データ）』は、事実（記述的知識）を示すこと。③『理由付け』は、『なぜならば、つまり～だから』と関係（説明的知識）、本質（概念的知識）を示すこと。④『裏付け』は、『どのような価値基準から主張されているか』とメタ知識を示すこと。」と、トゥールミン・モデルのそれぞれの項目の内容について御指導いただいた。

3 函館市立亀田中学校教諭 川端 裕介 氏

川端裕介氏は、「対話型論証モデル」を使った授業を実践されている。「考えプロセスシート」の根拠（事実・データ）と論拠の区別が難しいが、根拠（事実・データ）については、いつ、どこで、何をしたなど端的に述べるとよい。また、根拠（事実・データ）、主張、論拠の3点を分けて考えることが大切であり、「同じ」考えをもつ生徒同士の話し合いでは、この3点を一つ一つ確認するとよいと御指導いただいた。

VI 第2次授業研究に向けての改善点

1 検証項目1について

「考える」段階で事前に根拠となりそうな事実やデータを整理することで、「考えプロセスシート」に何を根拠とすればよいのかを明確にし、論拠を述べるができるようにする。

2 検証項目2について

「対話する」段階において、学級全体での話し合い活動のときに、視点のよい点、問題点について比較・検討するために反ばくの際に小グループでの話し合いを取り入れることで、根拠をもってより望ましい社会について考えることができるようにする。

VII 第2次授業研究（10月）

1 単元 日本の諸地域 近畿地方

2 目標

近畿地方は、古代から奈良や京都が都として栄えてきたため、歴史ある寺社、街並みが今も残っており、開発と景観保全をどのように進めていくべきなのかが地域の課題として挙げられることを捉える。そして、開発と景観保全のどちらに力を入れるべきなのかを様々な視点から考え、他者と対話することで、根拠をもって歴史的な街並みを有する地域に住む人々にとってより望ましい社会について考えることができるようにする。

3 検証項目

(1) 「考える」段階において、事前に根拠となりそうな事実やデータを整理して「考えプロセスシート」を作成することは、根拠をもって学習課題に対する考えの論拠を述べる上で有効か、「考えプロセスシート」への記述内容からつかむ。

(2) 「対話する」段階において、「考えプロセスシート」を活用した学級全体での話し合い活動のときに、「反ばく」について互いに検討して他者と対話することは、異なる考えに触れながら、根拠をもって近畿地方のより望ましい社会について考える上で有効か、学習後のプリントへの記述内容からつかむ。

4 実践の概要（6時間完了）

段階	主な学習活動
捉える	第1時 近畿地方の歴史的な街並みや伝統産業に関心をもつとともに、地勢図や雨温図から地理的特色を理解する。 第2時 近畿地方の歴史的な街並みと阪神工業地帯の特色を理解する。
	【学習課題】 京都市は、開発か景観保全のどちらに力を入れるべきだろう？
考える	第3時 学習課題に対する自分の考えをまとめるために、資料を読み、根拠となりそうな事実やデータを学習プリントに整理する。
	【調べる視点】 開発（高層マンション建設や企業誘致）・景観保全（歴史的な街並みを守る）
対話する	第4時 根拠となりそうな事実やデータを整理した学習プリントを基に、「考えプロセスシート」に学習課題に対する考えをまとめる。 【検証場面1】
	第5時 「考えプロセスシート」を基に、学習課題について、「同じ」考えの生徒同士のグループ、「異なる」考えの生徒同士のグループで話し合う。 第6時 「考えプロセスシート」を基に、学習課題について、学級全体で話し合い、近畿地方のより望ましい社会をプリントにまとめる。 【検証場面2】

5 第2次授業研究の結果と考察

(1) 検証場面1（第4時）

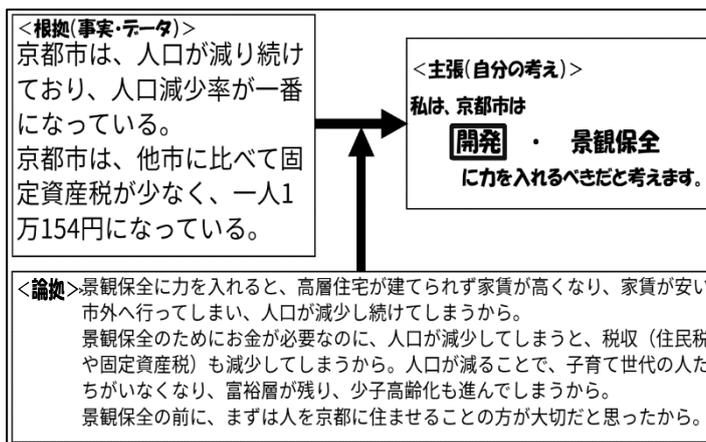
第3時では、学習課題に対する自分の考えをまとめるために、資料を読み取った。第1次授業研究では、「考えプロセスシート」に根拠を示すことができなかつたり、根拠を示しても論拠を記述することができなかつたりする生徒がいた。そこで、資料を読み取り根拠となりそうな事実やデータを学習プリントに整理した。生徒Bは、学習プリントに「開発」の根拠として、「京都市の人口は年々減少している」「景観保護は税収にマイナス」と記述した。「景観保全」の根拠として、「景観保全は地域の環境の向上につながる」「景観保全は町に対する人々の愛着や誇りが育まれる」と記述した【資料9】。

第4時では、根拠となりそうな事実やデータを整理した学習プリントを基に、「考えプロセスシート」に学習課題に対する自分の考えをまとめた。

生徒Bは、学習課題に対して「開発に力を入れるべき」と考えた。「京都市の人口減少率が最も高いこと」と、「京都市は、他市に比べて固定資産税が少ないこと」と複数の根拠をもち、「景観保全に力を入れると高層住宅が建てられず家賃が高くなるため、家賃が安い市外へ行ってしまい、人口が減少し続けてしまうから」「人口が減少してしまうと、税収（住民税や固定資産税）も減少してしまうから」などと論拠を述べた。第1次授業研究では、学習課題に対する考えを述べるときに、一つの根拠

資料番号	どちらの根拠？	資料から分かること
3	開発	京都には数多くの歴史的資産があり、歴史的景観を保全することは地域の歴史と文化を反映した人々の活動を守り、地域の環境を向上させることにつながる。
	景観保全	
4	開発	景観保全のメリットは町に対する人々の愛着や誇りが育まれることによって人々の交流が増える。
	景観保全	
5	開発 ・ 景観保全	京都市の人口は年々減少している。
13	開発 ・ 景観保全	景観保護は税収にマイナス。固定資産税が少ないことで市民1人あたりの税収は政令指定都市平均より1万154円少ない。

【資料9 生徒Bの学習プリントの記述】



【資料10 生徒Bが作成した「考えプロセスシート」】

にとどまったが、本単元では、二つの根拠をもって論拠を述べる事ができた【P. 88 資料 10】。

第 1 次授業研究で根拠をもって考えを述べる事ができなかった生徒 C は、「景観保全」を選択した。「京都には世界遺産をはじめとした様々な歴史的な文化遺産がある」ことを根拠として、「日本の世界遺産などは、人々の心の支えになるものだから、その歴史を忘れないためにも、昔の風景や建物を残し、次の世代に残していくためにも景観保全に力を入れるべきだと思います」と学習課題に対する考えの論拠を述べた。

(2) 検証場面 1 の考察 ※ 3 人欠席

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
学習課題に対して、複数の根拠をもって論拠を述べる事ができる。	学習課題に対して、根拠をもって論拠を述べる事ができる。	学習課題に対して、根拠をもって論拠を述べる事ができない。
28 人		1 人
18 人 (生徒 A・B)	10 人 (生徒 C)	

生徒 A・B・C のように、学習課題に対して、根拠をもって論拠を述べる事ができた生徒は、29 人中 28 人だった。これは、根拠となりそうな事実やデータを整理したことで、何を根拠にして論拠を述べるとよいかの分かりやすくなったためと考える。

(3) 検証場面 2 (第 6 時)

第 6 時では、学習課題についてまとめた「考えプロセスシート」を基に、学級全体で話し合い活動を進めた。反論に対して反ばくする前に、小グループでどのように反ばくするか互いに検討する時間を設けた。

第 1 次授業研究で、異なる考えに触れながらより望ましい社会を考える事ができなかった生徒 C は、「開発」の視点を選択した。反ばく前の検討の時間では、企業が失敗する可能性の意見について、「企業を誘致すれば税収

生徒 C：企業の取組が失敗する可能性もあると反論があったけど。
 生徒：でも、資料 14 に「企業を誘致すれば、税収が増加する」と書いてあるよ。
 生徒 C：確かに失敗する可能性はあるかもしれないけれど、「税収が増えることでインフラ整備に予算を充てられて地域の発展が見込める」という資料もあるから、やっぱり開発を進めることが大事なのではないかな。

【資料 11 生徒 C の反ばくの検討の会話】

が増加する」という他の生徒の意見をきっかけに「確かに失敗する可能性はあるかもしれないけれど、『税収が増えることでインフラ整備に予算を充てられて地域の発展が見込める』という資料もあるから、やっぱり開発を進めることが大事なのではないかな」と話し、失敗する可能性と税収増加による地域発展の見込みを比較しながら学習を進めた【資料 11】。

学級全体での話し合い前には、「捉える」段階の学習を振り返り、近畿地方が京都や奈良にある世界遺産や歴史的建造物などを目的に、国内外から多くの人を訪れる地域であることを確認した。また、阪神工業地帯がかつての日本最大の工業地帯であったこと、現代では高い技術力を誇る中小企業が集中していることなども確認した。そして、近畿地方のより望ましい社会についてプリントに自分の考えをまとめた【資料 12】。

【話し合い活動では、「開発」を選択】

これからの近畿地方は開発と景観保全を両立した社会になるとよいと考えます。なぜなら、近畿地方は、歴史があり歴史的な街並みを大切にすれば、地域が活性化するからです。そのためにも、開発を進めることで税収を増やし、景観保全をするための費用をまかなう必要があるからです。

< 凡例 _____ : 開発 (税収) の視点 _____ : 景観保全 (街並みを守る) の視点 >

【資料 12 生徒 C の「近畿地方のより望ましい社会」についてまとめた記述】

(4) 検証場面2の考察 ※ 3人欠席

A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
異なる考えに触れながら、根拠をもって複数の視点から近畿地方のより望ましい社会について考えることができる。	異なる考えに触れながら、根拠をもって近畿地方のより望ましい社会について考えることができる。	異なる考えに触れながら、根拠をもって近畿地方のより望ましい社会について考えることができない。
25人		4人
11人 (生徒A・B)	14人 (生徒C)	

生徒A・B・Cのように異なる考えに触れながら、根拠をもって近畿地方のより望ましい社会について考えることができた生徒は、29人中25人だった。これは、「考えプロセスシート」を活用した学級全体での話し合い活動のときに、反ばくの際に小グループでの話し合いを取り入れることで、自分が把握していなかった根拠や論拠に気付くとともに、それぞれのよい点や問題点を比較・検討することができたからだと考える。

VIII 研究のまとめ

1 実践後の生徒の様子

次單元「日本の諸地域 中部地方」では、学習課題「中部地方がより発展するためにはどの産業に力を入れるべきだろう」と設定して学習を進めた。

まず、中部地方の地理的特色や様々な産業を捉えて、「考えプロセスシート」に学習課題に対する自分の考えの根拠と論拠をまとめた。次に、それを基に話し合い活動を行うと、「資料○にあるように、中部地方には日本で最も工業生産額が高い中京工業地帯があり、日本のものづくりを支えているので、自動車産業を始めとした工業に力を入れるべきです」「資料△にあるように、地場産業が盛んに行われ、国内だけでなく国外にもシェアを伸ばすものもあるので、地場産業に力を入れるべきです」などと、根拠をもって自分の考えを述べる生徒の姿が見られた。

そして、話し合い活動後に、中部地方のより望ましい社会について考えをまとめた。すると、多くの生徒が異なる考えに触れながらより望ましい社会について考えることができ、研究の成果を感じることができた【資料13】。

北陸地方では冬の降水量が多いところから地場産業が発達し、中央高地では涼しい気候を生かして高冷地農業が盛んになり、東海地方では大都市圏に近く多くの労働力を確保して機械工業が発達してきました。これらの産業はどれも大切で、私たちの生活を支えています。これらからも、その土地や気候、大消費地と結び付く交通網など、その地域の自然環境や社会的状況に合った産業を発展させていくことが大切なのではないかと考えました。

【資料13 生徒Cの「中部地方のより望ましい社会」についてまとめた記述】

2 今後の研究に向けて

本研究では、「対話型論証モデル」を参考に、「考えプロセスシート」の作成を通して、社会に見られる課題に対して根拠をもって自分の考えをもち、「考えプロセスシート」を活用した他者との対話を通して、異なる考えに触れながらより望ましい社会を考えることができた。しかし、まだ異なる考えに触れながら考えることが不十分だった生徒もいたため、今後は、互いの考えを「認め合う」ために、それぞれの視点のよい点と問題点を整理した上で対話し、互いの考えのよさに触れながらより望ましい社会を考えることができるようにしていきたい。